



書道研究誌

書の光

3
2023

Vol.655
宮城野書道会

漢詩を味わう

第164回



丙申春 就醫秦淮 寓丁家水閣 決兩月 臨行
作絶句三十首 留別留題 不復論次 第三首
錢謙益

舞榭歌臺羅綺叢 舞榭 歌臺 羅綺叢がる

都無人跡有春風 都て 人跡無くて 春風あり

踏青無限傷心事 踏青 限り無し 傷心の事

併入南朝落炤中 併せて南朝落炤の中に入る

華やかに歌舞の催されたこの舞台のあたりは、着飾った婦人たちが群がっていたのに、いまやまるで人影はなく、いたずらに春風が吹いている。春の青草を踏むにつけ、限りなくひろがる昔日への追憶は、この荒涼たる遺跡と一緒に、かつての南朝のみやこを、いま真つ赤に染めている落日のひかりにつつまれている。

《舞榭歌臺》 歌舞を催すうてな。榭は屋根のある台。

《羅綺》 うすぎぬとあやぎぬ。それらで着飾った婦人たち。

《踏青》 春の日の郊外に行遊することをいう。また三月上巳の曲水の宴を言う場合もある。

《南朝》 東晋が滅びた後の南北朝時代の南朝を言う。

《落炤》 炤は照と同じで、落日の光。

連載の「書の美について」において、二ヶ月に亘って明末清初の書人、張璪と倪元璐の二人を取り上げましたが、今月の漢詩を味わうは同時代の錢謙益の詩を取り上げます。錢謙益の生きた時代から約千年前の南朝を偲ぶ情に託して、明の滅亡をい

たんだ詩です。一六五六年の明滅亡から十二年後に作った三十首の中の第三首です。この詩に登場する南朝は、東晋が亡びたあとの南北朝時代の健康（南京）を都とした宋・齊・梁・陳と興亡した南朝を指します。

錢謙益は、明朝の礼部尚書を務めた高官で、文壇においても明末清初の中心人物でした。詩人としては呉偉業・龔鼎孳とともに「江左三大家」と称されています。作者自身が宮廷の中心で活躍し、華やかな歌舞を鑑賞し、行楽に興じた往時を懐古します。そして、かつて歌樓の連なる南京の秦淮運河兩岸は、清に滅ぼされて荒涼の地と化し、落日のひかりに包まれていると亡国への思慕を込めて詠っています。

明滅亡に際しては、錢謙益の夫人柳如是に自殺を迫りましたが躊躇い、清に降伏文書を奉り清に仕えます。その節操を欠いた行動は識者の批難の的となりました。しかし清に降ったあとは、明朝をしのんで清を諷する詩を作り続けたため、百年のちに乾隆帝は彼の著作をすべて没収して発禁処分としています。

前出の「江左三大家」のひとり龔鼎孳は、明最後の皇帝崇禎帝が自殺した時に、自分も死のうとしましたが、錢謙益とは逆に夫人顧媚に止められて思いとどまり、清に仕え高官となつていきます。その後は反清運動をする人々を密かに庇護し続けたと伝えられます。もう一人の呉偉業も、崇禎帝に殉じようとしたが果たせず、郷里に帰りましたが、強く請われて清に三年余り仕えました。これを深く後悔して「自ら歎ず」と題する詩をつくり、墓には「詩人吳梅村之墓」とだけ刻むように遺言したといわれます。今月の「書の美について」で取り上げた倪元璐は明に殉じて自殺しています。支配者が漢民族から満州族へ変わるといふ、大きな時代の転換期における身の処し方は各人各様というほかありません。

参考文献・漢詩選「清詩線」（集英社）・漢詩の事典（大修館書店）・井波律子著「中国名詩集」（岩波書店）

楚国千里遠し 孰か方寸の違ふことを知らん 春游客有るを歡び 夕寝衣無きを賦す 江水氷を帯びて緑に 桃花雨に随つて飛ぶ
九歌 深意有り 珮を捐てて 乃ち言に歸らん

楚國千里遠 孰か方寸違 春游客有るを
歡び 夕寝衣無きを賦す 江水氷を帯びて
緑に 桃花雨に随つて飛ぶ

《大意》ここ楚のくには都から離れること千里の遠きにある。この地に、こと志と違つて渡された私の心を誰が理解してくれようか。この異郷

では、春の遊びには訪ねてくる客があることを心から歡び、夜寝るときは無衣の詩を賦して心を慰める毎日だ。江の水は氷を交えてあ
おあおと流れ、桃の花は雨とともに飛び散つてゆく。この地をさすらつた屈原の九歌には、奥深い心がこめられている。私も屈原のよ
うに珮玉を江のほとりにおき、都に召し還されるのを願うのみだ。(儲光義詩・漢陽即事)

誰が家にか明月清風無からん

誰家無明 誰家無明
月清風 月清風

《大意》明月が見え清風の吹かない家がどこにあらう。いかなる人にも仏心仏性のあること。(碧巖録)

遙愛雲
木秀

読み 遙かに雲木の秀でたるを愛し（遙か遠くから、そのあたりの雲や木のすぐれたさまをめでていたが）

佐藤象雲書

「番」の位置取りに注意し
波筆は上部を載せて暢びやかに

左右の払いの均衡を保つ

中央部「心」を小さめに
下部は左右に伸びて安定させる

「禾」と「乃」のバランスに注意
「禾」の左右は起筆位置や長さ角度などいろいろ試して欲しい

雨冠は幅をもたせ、「云」はどっしりと

一般部規定課題出品について
・規定課題は段級の区別なく、前頁掲載の五言句となります。
・初段以下の方に限り、前半二文字または後半三文字でも構いません。
・規定課題(楷書)の出品はひとり一点に限ります。

連月課題

王維詩

「藍田山の石門精舎」

(前半)

落日山水好

落日 山水好し

漾舟信歸風

舟を漾わせて 歸風に信す

玩奇不覺遠

奇を玩んで遠きを覺えず

因以縁源窮

因りて以て源を縁ねて窮む

遙愛雲木秀

遙かに雲木の秀でたるを愛し

初疑路不同

初めは路の同じからざるかと疑う

安知清流轉

安んぞ知らん 清流轉じて

偶與前山通

偶々前山と通ずるを

捨舟理輕策

舟を捨てて輕策を理む

果然愜所適

果然として適する所に愜う

老僧四五人

老僧 四五人

逍遙蔭松柏

逍遙して松柏に蔭う

(後半に続く)

草書

行書

※成家・師範の随意作品出品は二点までです。

遙 愛 雲
 木 秀
 遙 生 雲
 木 秀

次号課題

隸書

遙 愛 雲
 木 秀
 初 疑 路
 不 同

◇各体とも書風は自由です。特に上位者は古典などを参考に創意溢れる作品をご出品ください。

(両部とも本会所定の指定用紙を使用のこと)

支部	順位	氏名

苦しみを多くの人と共にね

来たのしみもまたかか

与謝野 晶子

和泉溪石 先生書



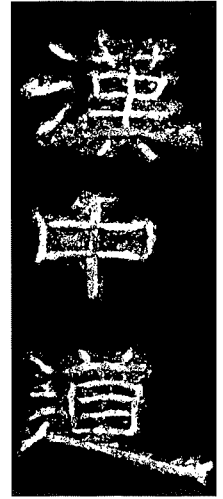
佐藤象雲書

音

ガンセンエンケツ
ギンシヨクイコウ

略解

室内には丸いきれいに絹扇が清らかに
銀の燭台は明々として



漢中（に興る）。道は（子午に由り）……



■石門頌せきもんしょう（後漢・西暦二四八年）の臨書（6）

象雲臨

『漢中道』

石門頌の特徴は古雅深趣という言葉で表現されます。細めの強い線で、古拙のなかに暢びやかな姿態を見せています。清時代の金石学の大家楊守敬は「その行筆真に野鶴閑鷗の如く、飄々として仙ならんとす。」と言っており、ゆったりとして飄逸な風趣があつて、八分隸のなかでも古隸に通じる樂趣を感じます。

今月は、文節をまたがる三文字を一行に臨書します。二行にすると文字内の空間を狭めてしまい原帖のゆったりした雰囲気表現しづらくなりますので、三文字の字幅を十分にとつて臨書してください。特に「道」の波筆は直線的で引き締まった線です。思い切つて長くしてください。

百福而長今

百福（を運して）長く今なり。

百福而長今

■王羲之・集字聖教序（唐・西暦六七二年）の臨書（20）

象雲臨

『百福而長今』

集字聖教序は弘福寺の沙門懷仁が、内府に蔵してあつた王羲之の真跡から字を拾い集めて碑に刻したものです。現存する集字碑では最も古いものです。集字に際しては多難を極め二十年以上の歳月を費やした労作です。

しかし王羲之の肉筆と集字とは明らかに大きな違いがあります。そのため集字碑の習い方は様々な注意が必要です。何度も述べていることですが、文字同士の気脈がなく文字大小太細も不自然です。さらに楷書に近い行書から急に柔らかな草書になる場合もあります。

学ぶ際には石刻のため紙に書かれたものではないことを念頭におきます。線の潤濁を加味して臨書しても構いません。また王羲之が紙に直接書けばこのようにはならなかったのでは、という想像を働かせて、文字を自分なりに操って書くことは非常に有益だと思えます。